

臨床病理に関連する雑誌について

石原明徳

1. はじめに

最近の遺伝子、分子生物学を中心とする医学・生物学の発展はめざましく、日々膨大な量の情報が蓄積されつつあります。の中には診断や治療に応用できる成果が着実にみられます。臨床応用可能な成果を患者さんにとって利益になるように還元するのがわれわれ臨床医の役目です。

新しい医学的知識や研究成果を知る手段の主なものは学会への参加と医学雑誌であります。しかし、忙しい臨床の現場では学会への参加はままならず、おのずと医学雑誌が情報源として重要になってきます。市中病院に勤務する病理医としてどのように情報を入力しているかを述べてみます。

2. 臨床病理とは

臨床病理という用語は、漠然と分かってはいても、内容を理解できていない人がいるのではないのでしょうか。臨床病理 (Clinical pathology) は、血液検査をはじめ臨床化学、免疫・血清検査、微生物検査、遺伝子検査、そして病理検査などを包括した検査医学の総称として用いられる場合があり、臨床検査 (Clinical laboratory) ともいわれています。

一方、臨床検査の1分野である病理検査を臨床病理と呼ぶ場合があります。これは基礎病理に対する言葉として用いられ臨床に役立つ病理を意味しています。

病理は疾病の本態、原因を究明することを目的とした医学の一分野であり、研究対象によって大きく基礎病理と臨床病理に分けることができます。前者は実験病理とも呼ばれ、今日では遺伝子解析を中心とした分子病理学が研究の主流になっています。他方臨床病理は人体病理、診断病理ともよばれ、日常の臨床医学にとって重要な診療部門のひとつです。診療を円滑にし、安全かつ健全な医療を保証し、患者生命の保全のために大切な役割を果たしています。病理診断業務には組織診、細胞診、病理解剖、電子顕微鏡検査、免疫組織化学検査があり、具体的に光学顕微鏡、電子顕微鏡あるいは免疫組織化学などの技法を用いて、患者から採取された細胞・組織から得られる生体情報をもとに疾病の診断、治療法の選択の指針、および治療の効果判定などを行いません。従って臨床各科の広範な疾病について臨床経過、治療法、予後、検査法の意義について理解しておくことが要求され、病理以外の専門誌にも目を通し、日進月歩の医学的知識を吸収しておくことが大切です。

臨床検査診断の広範な分野の紹介は、紙面の制限があるため割愛させていただき、ここでは病理検査に関連する雑誌について紹介することにします。

3. 病理診断に関連する雑誌

病理一般雑誌のうち、日常の病理診断に役立つ雑誌としては「American Journal of Surgical Pathology」「Human Pathology」

「Histopathology」があります。病理形態学的診断を中心に、免疫組織化学、超微形態所見、臨床経過、予後などが詳しく報告されており、病理医であれば必ずともいいほど目を通す雑誌です。「Virchows Archiv」も同系の雑誌で、免疫組織化学についてのデータが多く掲載されています。「American Journal of Clinical Pathology」は病理をはじめ臨床化学、血液学、感染症など臨床検査全般についての論文が掲載されていて広義の臨床病理の内容をもった雑誌です。臨床検査の測定方法やデータの解釈のしかたなど、日々の診療に役立つ内容のものが多く、日本病理学会の機関誌「Pathology International」にも病理診断に関する報告が増えてきました。

和雑誌では「病理と臨床」を最も活用しています。臨床のための病理を意識した数少ない和雑誌の一つで、内容も充実しています。各号に特集記事が編集され、テーマごとに整理されているので、後の文献検索に便利です。各地で活躍している一人病理医の紹介や、病理医間の意見交換のコーナーもあり楽しめます。「病院病理」は日本病理医協会が交見会で検討した症例を短報形式で収録したものであり、討論内容を含めた記載がなされています。その他、「American Journal Pathology」「Laboratory Investigation」は細胞生物学や分子生物学に関するレベルの高い研究論文が多く掲載されています。

腫瘍を専門に扱った雑誌には、「Cancer」があります。原著論文や症例報告は病理診断に大変参考になります。「Cancer Research」は、ベーシックな研究論文が大半で、臨床に直結した論文は姉妹本の「Clinical Cancer Research」に、まとめられています。「British Journal Cancer」「International Journal Cancer」も分子生物学に関する論文がほとんどです。「Japanese Journal of Cancer Research」には病理診断に参考となるものもありますが、どちらかというと研究が主体のもので、和雑誌の「癌の臨床」「乳癌の臨床」には症例報告が多いので、症例をチェッ

クしておきます。

細胞診は婦人科、呼吸器、泌尿器などの剥離細胞診が対象でありましたが、近年は、細い針を用いた穿刺吸引細胞診を積極的に行なうようになり、ほとんどの臓器の細胞診が可能となり診断精度も向上しています。患者の身体的負担が少なく安全でしかも安価な検査法として普及しています。和雑誌では「日本臨床細胞学会雑誌」、欧文では「Diagnostic Cytopathology」「Cytopathology」「Acta Cytologica」があります。いずれも総説や症例報告を主として構成されています。かつて「Cancer」に掲載されていた細胞診の論文は「Cancer; Cytopathology」に分冊 (Vol. 81より) され、大変便利になりました。穿刺吸引細胞診を中心とした総説論文が掲載されています。

電子顕微鏡検査は、細胞組織の微細構造を観察することによって、病理診断をより正確にする補助検査として実施されます。専門誌として、「Ultrastructural Pathology」「Journal of Electron Microscopy」と、「Medical Electron Microscopy」があります。「Journal of Ultrastructure」は研究論文が主流です。

免疫組織化学検査は抗原-抗体反応を利用して組織、細胞、細胞膜などに存在する抗原を目にみえる形で検出するものです。診断精度を上げる補助手段として、またより決めの細かい病理診断を可能とし、病態の理解度を高める検査法として普及しています。免疫組織化学、細胞化学のみを扱った専門誌は見当たりません。病理や腫瘍関連雑誌の総説や特集記事で報告されているものを参考にして、整理していきます。「Cancer」「American Journal of Surgical Pathology」「Human Pathology」「Histopathology」「Virchows Archiv」、「病理と臨床」などに多く掲載されています。

4. 病理診断に直接関連しない雑誌

病理関連以外の雑誌に目を通し、情報の網

を張り巡らすことが病理医には必要です。

「Lancet」「New England Journal of Medicine」の一流誌は欠かせません。「医学のあゆみ」のメディカルトピックスは要領よくまとめられていますし、「内科」「日本臨床」「最新医学」などの和雑誌の特集には目を通しています。

また、病理医と臨床医の接点となるのが、CPC (Clinicopathological conference 臨床病理検討) です。症例の臨床症状、検査所見の解釈、治療法の適否、病理所見を検討し、疾患を総合的に理解するとともに反省し、診療の質の向上に欠かせないもののひとつです。

「New England Journal of Medicine」や、「American Journal of Medicine」に掲載されている CPC は各科の専門医によるディスカッションの内容、病理診断に至る検査値の解釈や考え方は病理医にとって大変勉強になります。またテーマとなった疾患の最先端の考え方を知ることができます。

病理は形態学的診断を基本としており、形態に関する情報を必要とするのは当然ですが、観察する標本の善し悪し（出来具合）がとても大切です。生体から得られた細胞・組織をそのまま顕微鏡で観察するわけにはいきません。標本を固定し、薄切し、染色してはじめて観察できます。病理標本の作成にはヒトの手作業に頼る部分がまだ残っており、作成過程の技術がまずいと診断不可能となったり、判定ミスや誤診の原因になります。すなわち標本作成技術とその精度管理が重要なのです。技術や精度管理、精度保証を専門的に扱った雑誌は見当たりませんが「Medical Technology」「臨床検査」「病理と臨床」に技術講座としてシリーズで掲載されています。将来、技術革新にともなって新しい手技、工

夫や検査法が開発されると予想され、標本を作成する臨床検査技師の技術の向上に欠かせない情報であるとともに、われわれ検査に携わる医師にとっても大変参考になります。近年医療の質が問われるようになり、かつてあまり重要視されていなかった病院で実施される検査の精度管理や精度保証がクローズアップされてきています。米国などと比較してこの分野の立ち遅れが目立っており、関連記事の充実が望まれます。

5. おわりに

病理医の仕事のうち、半分は読書に時間を割いていると言っているでしょう。それでもすべての雑誌に目を通すことは物理的に不可能であります。おびただしい情報をいかに効率よく整理し、迅速に間違いのない知識を取得していくかは、臨床医にとって共通した悩みです。現在、文献の検索は、MEDLINE や医学中央雑誌CD-ROM版を利用して、かつてのIndex Medicus と医学中央雑誌を使っただけの手作業のころに比べれば随分楽になりました。しかしこの検索手段も今やインターネットに取って変わろうとしています。幸いインターネットの導入にかかる経済的負担は軽くなり個人でも支払いうる金額になってきました。インターネットによる情報収集がどの程度まで発達するのか想像もつきませんが、病院図書館の必要性がなくなることはないでしょう。子供のころ、待ち侘びた新刊雑誌を手にする時の新鮮さとその喜びを無くしたくはないものです。インターネットが病院に導入される日を待ちわびながら、診療の合間に少しでも図書館に足を運ぶようところがけています。

最後に、恒例に従って臨床病理関連雑誌の Impact factor を記しておきます。

表 臨床病理関連雑誌のImpact Factor (1996)

	Impact Factor	Immediate Index
1. Cancer Research	8.958	0.982
2. American Journal Pathology	7.246	0.781
3. Laboratory Investigation	4.640	0.492
4. Journal Pathology	4.424	0.370
5. American Journal Surgical Pathology	3.797	0.418
6. British Journal Cancer	3.666	0.293
7. Human Pathology	3.659	0.265
8. International Journal Cancer	3.534	0.344
9. Cancer	3.296	0.368
10. Clinical Cancer Research	3.162	0.550
11. American Journal Clinical Pathology	2.522	0.397
12. Japanese Journal Cancer Research	1.839	0.000
13. Histopathology	1.734	0.278
14. Virchows Archiv	1.718	0.041
15. Cytopathology	1.063	0.137
16. Ultrastructural Pathology	0.930	0.030
17. Diagnostic Cytopathology	0.903	0.074

出典「Jounal Citation Report®' 1996」